

汪精衛と近衛首相

——ハノイ滞在とその苦惱——

伊原 沢 周

近衛首相の和平の呼びかけに応じた重慶国民政府の最高指導者のひとり汪精衛（兆銘、当時国民党の副総裁、中央政治委員会主席・国民参政会議長）は、一九三八年十二月十八日に重慶から雲南省昆明市へ脱出し、雲南省主席竜雲の庇護の下に、さらに昆明市から仏印のハノイへと逃れた。翌々二十日、汪は重慶の国民政府行政院副院長の張群あてに、「和平と防共のため、進退を迫まられ、種々の困難によって事前に貴兄のご同意を求めることができず、重慶を離れた。このかつてな行動に自分は今全責任を取るつもりであるから、ご諒解されたし」と打電し、重慶脱出の真意を伝えた。

ハノイに着いた汪は、同市コロン街二十七番地、友人朱培徳夫人の家に仮住いし、以来、一九三九年四月二十五日に上海へ行くまで、ここでの滞在日数は、合計百二

十七日に及んだ。この長期滞在の原因について、一般に次のように考えられている。一、中国西南地区の実力者たとえば竜雲、陳済棠、張発奎らに呼びかけ、彼の和平運動に参加させ、重慶国民政府の抗日戦闘力を弱めようとしたこと、二、国民党の長老として、同党中の重要なメンバーを誘って彼と同一行動を取らせようと画策したことである。結果として、汪の和平運動の呼びかけに答えた人は、誰もいなかった。のみならず、全中国の国民はいっせいに彼の日本に対する屈辱的妥協に激しく悪罵を浴せた。やがて、汪の腹心たる曾仲鳴が国民政府のスパイに暗殺され、汪自身の安全さえも脅され、ついに彼は、ハノイを離れるに至ったのである。

もともと、汪の重慶脱出は、近衛首相の和平提案に依じて行なわれたのだが、上述の彼のハノイ長期滞在とハノイを離れた理由は充分に明らかにされていない。その要因を解明するため、本論は、若干の史料に基づいて、この問題をとりあげて再検討してみたい。

一 日本の和平提案

一九三七年六月四日、第一次近衛内閣が誕生した。新内閣成立後、約一カ月、すなわち七月七日、日本の北中

国駐屯部隊が、北平（今の北京）附近の宛平県で中国の守備軍と武装衝突した、いわゆる蘆溝橋事変が起った。

事変の勃発について、当時、近衛内閣も首相自身も事前になにも感知していなかったといわれている。事変後、参謀本部は事変の不拡大論を主張したのに、陸軍大臣杉山元や他の陸軍将校はそれを受け入れなかった。近衛首相自身の意見は、参謀本部の主張に傾き、早期に戦闘を中止させ、中国と平和解決しようとした。このことは、七月十一日の「蘆溝橋事件処理に関する閣議決定」⁽³⁾によって知ることができる。だが、この閣議決定中の「局面不拡大現地解決ノ方針」は、現地駐屯部隊に任せて解決しようとするものである。これは事実上、不可能であった。やがて、戦火は上海にまで飛び火した。杉山陸相からの要求によって近衛首相は、「支那軍ノ暴戾ヲ膺懲シ以テ南京政府ノ反省ヲ促ス為今ヤ断乎タル措置ヲトルノ已ムナキニ至レリ」⁽⁴⁾との声明を発表した。こうして戦争は拡大の一途をたどり、中止の望みは、いっそう困難となった。

八月十三日、日本海軍は上海に出兵し、海軍大臣米内光政は、陸相杉山に歩調を合せた。⁽⁵⁾ 陸海両相の対華強硬態度は、近衛首相の不拡大方針を牽制した。このいきづ

まった局面を打開しようと考えた参謀本部作戰部長石原莞爾は、近衛首相に南京へ飛んで行き、蔣介石と直接話して事変を終結させるように、と建言した。近衛は、これに賛成の意を示したが、現地軍や陸海両相がこれを無視して行動することになれば、首相の面目や日本政府の国際的信用を失なう恐れがある。そのため南京へ飛ぶという計画は実現することができなかった。⁽⁶⁾

一九三七年の冬、近衛内閣は駐華ドイツ大使トラウトマン (Oskar Trautmann) に和平の仲介を依頼したが、日本側の和平提案の条件が、きびしすぎ、国民政府は、それを受け入れることができなかった。⁽⁷⁾ 翌年一月十一日、近衛首相は「国民政府ヲ相手ニセズ」との声明を発表した。

帝国政府ハ南京攻略後尚ホ支那国民政府ノ反省ニ最後ノ機会ヲ与フルタメ今日ニ及ヘリ。然ルニ国民政府ハ帝国ノ真意ヲ解セス漫リニ抗戦ヲ策シ、内人民塗炭ノ苦ミヲ察セス、外東亜全局ノ和平ヲ顧ミル所ナシ。仍テ帝国政府ハ爾後国民政府ヲ对手トセス、帝国ト真ニ提携スルニ足ル新興支那政權ノ成立発展ヲ期待シ、是ト両国々交ヲ調整シテ更生新支那ノ建設ニ協力セントス。⁽⁸⁾

いわゆる新興支那政權とは、すなわちこの声明発表後の、三月二十八日に南京で樹立された「中華民國維新政府」を指している。この維新政府の首班は、行政院長の梁鴻志であった。同政府の体制を強化するためであろうか、九月二十二日、日本は、一九三七年十二月十四日に北平で樹立された王克敏（行政委員長）の「中華民國臨時政府」と南京の維新政府とを合併させ、「中華民國政府連合委員會」を結成し、王克敏を主席委員に擁立した。しかし王克敏にしろ梁鴻志にしろいづれもその声望、影響力共に低く、重慶国民政府をゆるがすことは到底不可能である。従って、近衛首相は、より有力者を物色し、ついに重慶国民政府の指導者たる汪精衛に白羽の矢を立てたのである。

それまでも石原莞爾は、「汪精衛工作」は事変解決の核心であると近衛首相に申し入れていた。⁹近衛の「国民政府ヲ相手ニセズ」との声明は、事実上、「蒋介石を相手にせず」ということを意味する。この声明は「外務省の起案により広田外相から閣僚に諮られたもので、これはのちの北支臨時政府の王克敏の要望にもとづき、軍部が正面から乗って「出てきたものだ」とのことだが、もちろん本来の陸軍首脳のできあがりである。¹⁰と矢部貞

治氏は指摘している。この声明発表後の近衛は、「余自身ふかく失敗なりしことをみとむるものである。従って、この声明の誤謬を是正せねばならぬという考えの下に、再び重慶との、よりをもどすことに、種々の手を打ったのである」¹¹という。他方、重慶国民政府内部において、従来、親日派の首領としての汪精衛は和平論を唱え、近衛との関係をひまに深めていった。

一九三八年五月二十六日、近衛内閣の改造が終った。近衛は広田に代えて宇垣一成を外相に任じた。入閣後の宇垣は、「一月十六日の声明は、実は余計なことを言ったのですから――併しうまく取消すやうに」¹²といい、対華和平を推し進めるべきだと主張した。それと同時に、参謀本部謀略課長影佐禎昭・中国課長今井武夫らも「汪精衛工作」を積極的に展開した。七月十二日に近衛首相は、外務、大蔵、陸軍、海軍の四相を集め、「五相会議」を開いた。会議の議決案は、「時局に伴ふ対支謀略」であった。その中の第一条には「支那一流人物ヲ起用シテ支那現中央政府並支那民衆ノ抗戦意識ヲ弱化セシムルト共ニ鞏固ナル新興政權成立ノ氣運ヲ醸成ス」¹³とある。この「一流人物」とは汪精衛を指している。それと同時に、汪は駐華イタリア大使を通じて近衛あてに親書を寄せ

た。

近頃、ついでにイタリア大使館から閣下および貴同僚のご意見を拝聴致しました。貴国の主な憂慮は、將來中国の対日態度が、いったいどうなるのか、ということであろうと思われます。また貴国が和平を熱望していることも聞きました。將來中国はきっと対日友好政策を取ることと思いますが、和平については、相当の保証がないと困難であると思います。¹⁴

当時、重慶国民政府の中で、秘密裡に日本当局と接触した人物は、外交部アジア局長高宗武と、課長董道寧であった。彼らは、ひそかに香港・日本・上海の間を往来し、日本当局と汪精衛との間の橋渡しをした。同年十月末、廣州、武漢が相次いで陥落し、中国にとっては、きわめて不利な局面を迎えた。この時機をにらんだ近衛首相は、ついに「国民政府と雖ども拒否せざる旨の政府声明」(いわゆる第二次近衛声明)を発表した。時は十一月三日である。

帝国陸海軍ハ、克ク広東、武漢三鎮ヲ攻略シテ、支那ノ要城ヲ戡定シタリ。国民政府ハ既ニ地方ノ一政權ニ過キス。然レトモ、同政府ニシテ抗日容共政策ヲ固執スル限り、コレカ潰滅ヲ見ルマテハ、帝国ハ

断シテ矛ヲ収ムルコトナシ。帝国ノ翼求スル所ハ、東亞永遠ノ安定ヲ確保スヘキ新秩序ノ建設ニ在リ。今次征戦究極ノ目的亦此ニ存ス。

コノ新秩序ノ建設ハ日滿支三国相携へ、政治、經濟、文化等各般ニ巨リ互助連環ノ關係ヲ樹立スルヲ以テ根幹トシ、東亞ニ於ケル國際正義ノ確立、共同防共ノ建成、新文化ノ創造、經濟結合ノ実現ヲ期スルニアリ。是レ實ニ東亞ヲ安定シ、世界ノ進運ニ寄与スル所以ナリ。(下略)¹⁵

この声明発表後、重慶国民政府内部の反応は、きわめて複雑であった。国民党中央宣伝部副部長の周仏海は、次のように記している。

羅隆基氏が来談し、戦争がこのまま遷延すれば、きっと国を亡すことになるうという。難局を打開するには、非常な行動を取らなければだめだ。今や、天下の諒解を求めずとも、後世の了解は必ず得られよう。もし国を救うことができるならば、一時、個人の名譽が誇りを招こうとも致しかたない。共産党の、和平に反対し亡国に至らうとも抗日戦争を堅持すべきだという考え方は一顧の価値もないと、私は申した。羅は、誠にそのとおりだといふ。¹⁶

これによって汪派の人たちの動揺した実態がうかがわれる。その時、高宗武と梅思平は、周仏海の指示を受け、香港より上海へ行った。高・梅は汪精衛の代表として、日本側の影佐禎昭、今井武夫らと和平談判を開始した。談判の場所は上海虹口公園附近にある一棟の洋館―重光堂に設けられたので、この会談は、重光堂会談ともいう。双方討論の結果、ついに十一月二十日に「日華協議記録」六カ条、「日華秘密協議記録」六カ条が、それぞれ調印された。⁽¹⁷⁾ その主な項目は、(一)日華防共協定を締結すること、(二)中国は満洲国を承認すること、(三)日華経済の提携、(四)協約以外の日本軍は日華両国の和平回復後即時撤退を開始することなどである。

この協議記録を、梅思平は上海から香港を経由して重慶まで持参してきた。周仏海の十一月二十六日(土)の日記には、次のように書いている。

八時起床。香港から帰った梅思平が来訪し、大意を略述した後、すぐ共に汪の官邸へ赴き、上海での高宗武らの談判経過を報告し、また持ち帰った双方の協議記録および近衛宣言の草稿に基づく打ち合せは、十二時ごろまで続いた。⁽¹⁸⁾

結局、汪精衛は、協議記録に全面賛成の意を示して、

重慶から脱出する決意を固めるに至ったのである。⁽¹⁹⁾

二、汪の脱出と日本政局の変化

協議記録によれば、汪精衛らは重慶から脱出した後、近衛首相は、ただちに對華宣言を発表し、この對華宣言の発表と同時に、汪はただちに蔣介石との關係をきっぱり断絶することを宣言する、という段取りであった。

汪精衛の重慶脱出の予定日は十二月八日であった。これが近衛首相に伝えられた後、近衛首相は同月十日東京から大阪へ行き、大阪で講演の形で對華声明を発表することになった。しかし、やがて汪から予定日の脱出不能の飛電が入った。近衛はとにかく病氣ということにして西下を中止した。二十一日午後七時に至り、香港滞在中の今井武夫から「汪が二十日にハノイに到着」という飛電が来た。⁽²⁰⁾ 翌二十二日、近衛首相は「近衛三原則」(第三次近衛声明)を発表した。その要旨は以下である。

一、日滿支三国ハ東亞新秩序ノ建設ヲ共同ノ目的トシテ結合シ、相互ニ善隣友好、共同防共、經濟提携ノ実ヲ挙ケントスルモノテアル之カタメニハ、支那ハ先ツ何ヨリモ旧来ノ偏狭ナル觀念ヲ清算シテ、抗日ノ愚ト滿洲国ニ対スル拘泥ノ情トヲ一擲スルコトカ

必要テアル。

二、東亜ノ天地ニハ「コミンテルン」勢力ノ存在ヲ許スヘカサルカ故ニ、日本ハ日独伊防共協定ノ精神ニ則リ、日支防共協定ノ締結ヲ以テ、日支国交調整上喫緊ノ要件トスルモノテアル。

三、日支經濟關係ニツイテハ、日本ハ何等支那ニ於テ經濟的独占ヲ行ハントスルモノニ非ス、又新シキ東亜ヲ理解シコレニ即応シテ行動セントスル善意ノ第三国ノ利益ヲ制限スルカ如キコトヲ支那ニ求ムルモノニ非ス、唯飽ク迄日支ノ提携ト合作トヲシテ実効アラシメンコトヲ期スルモノテアル。²¹⁾

当時、ハノイに脱出した汪精衛は、近衛声明の呼びかけに答えるため、「中央常務委員会・国防最高会議宛の文」を草し、周仏海・陳公博らに、香港へ持って行かせ、同月二十九日に香港で発表することになった（一般に、この二十九日発表予定の文は「艶電」と称する）。しかし、香港の顧孟餘は、この文の発表に反対した。²²⁾結局、二日遅れの、三十一日に香港の『華南日報』にやっと掲載された。その主な内容は、前掲の「近衛三原則」に沿って重慶国民政府・国民党の要員らを説得し、彼らにこの三原則に賛成させ、日本と和解すべきだ、というのである。

この文は艶電が発表されるや、大きな波紋を投げかけた。国民党総裁の蔣介石は、ただちに重慶で同党の中央執行委員会臨時緊急会議を開き、汪精衛の党籍剝奪を決めた。ここに汪と重慶との關係に終止符が打たれた。

汪の脱出と艶電文の公布は、近衛首相にとって「汪精衛工作」の最大の成果を収めたものといってよい。逆に、汪は、これより近衛首相と合作し、共に「東亜新秩序」を樹立することができるかと期待した。だが、その期待はみごとに打ちくだかれてしまった。重慶脱出後半月足らずで、当の近衛首相が辞表を提出（一九三九年一月四日）してしまったのである。汪にとってこれほど大きなショックはなかったであろうと推測できる。

もともと、近衛首相は、汪の重慶脱出前にすでに辞意をもらしていたが、汪の脱出延期によって辞表の提出もなばされていた。²³⁾汪の艶電文発表後、近衛首相がただちに辞任したのは近衛首相の対華問題が一段落したことを意味する。しかし、脱出後の汪精衛の処遇問題について、どうするべきかは、未解決のままであったといわなければならぬ。近衛内閣の書記長官風見章は、「近衛氏にあっては、このときは、汪を中心に新政権をつくらうなどとは、夢にも、かんがえてはいなかったという事実であ

る」といつている。²⁴ 汪の処遇問題の解決は、後継首相平沼驥一郎に一任するはかなかったのである。

しかし、汪精衛の重慶脱出は「日華協議記録」によつたものであつた。ハノイ到着後の汪は、いうまでもなく、近衛首相と合作し、共に「東亜新秩序」の建設、「共同防共」の達成に尽力しようとしたが、近衛首相の突然の辞任は、汪にとって全く意外なできごとという他はない。この辞任は、近衛・汪の間にある約束が反古にされたことを意味する。早い話、汪は近衛に騙されたのである。

だが、他方、近衛の苦しい立場もあつた。近衛の組閣後まもなく、蘆溝橋事変が勃発した。早期に事変を和解に持つて行こうとした近衛の願ひは、なかなか思うとおりになかなかつた。というのは、首相としての彼の対華政策が、つねに軍部に牽制されたからである。しかも、溫柔、迫力を欠く近衛は、軍部の一群の好戦的武人と、渡り合うことができず、結局、彼らの傀儡になつてしまつたといつていい。首相辞任の際、陸軍省は強く慰留の意を示したが、彼の辞意を止めることはできなかった。それ以上、軍部に利用されることを彼は容認できなかったのである。近衛は、「陸軍大臣は、つねに内閣の死命を制する状態であつた」といつている。²⁵ また、辞任の上奏

文には「どうもまるで自分のやうな者はほとんどマネキンガールみたやうなもので（軍部から）何も知らされないで引張つて行かれるのでございますから、どうも困つたもんで、まことに申訳ない次第でございます」とある。²⁶

首相辞任後の近衛は、枢密院議長に就任し、汪精衛問題解決のためか、平沼内閣の無任所大臣をも兼任した。突然の近衛首相の辞任を夢にも思ひおよばなかつた汪はこの新しい平沼内閣とは全く関係がなく、「近衛三原則」の約束が守られるかどうかと心配に堪えなかつた。従つて、ハノイ到着以後の汪は、平沼内閣の対華方針の行方を見守る以外仕方なく、日本との関係は行きづまつていた。汪は、周仏海、陳公博、陶希聖らを香港に送ると同時に、高宗武らを東京へ遣わして、平沼内閣の動向を調べさせた。この頃、ハノイに在留したままの汪は非常に孤独で寂しかった。²⁷

ハノイ滞在中の汪精衛の動きについて、『周仏海日記』には、何らの記録もない。だが、陳公博の「和平運動の前後と私の考え」という一文の中には、「ハノイを離れる際、私は、汪先生にずっとハノイに滞在して日本人とは交わらないようにと進言した」とある。²⁸ また、陶希聖は『潮流と点滴』の中で、ハノイ滞在中の汪と日本との関

係にいささかも触れていないが、武仙卿の話として、当時北平在住の周作人は、「日本の少壮軍人は専横で器量が狭く、移り気だ。宇垣一成大将は、彼らに九天の上に引き上げられ、また、彼らに九地の下に追い込まれた。

彼らは自国の軍司令官さえもこのようにあつかっている。いわんや外国の政客に対する態度は、いわなくても自明の理である」という⁽³⁰⁾としている。これは、汪精衛の和平派の人たちに冷水を浴せるが如き、風聞に外ならなかったと思われる。

確かに、日本陸軍中での指導的地位にあった軍人は宇垣である。彼は、陸相、朝鮮総督などの諸要職を歴任し、声望が高かった。近衛内閣改正の際、広田外相の後任に宇垣を指名したのは、彼の地位や声望で軍部をおさえ蘆溝橋事変を早期に解決しようとしたためだと考えられる。しかし、宇垣外相の在職は、わずか四カ月であった。宇垣は中国問題を処理する機構たる興亜院の創設に不満を抱き、外相を辞任した⁽³¹⁾。

宇垣の辞任によって近衛内閣の存続までが動揺した⁽³¹⁾。汪精衛が重慶から脱出してまもなく、近衛首相は内閣の解散を宣布した。

新首相の平沼は、就任以来、全力をあげて、日・独・

伊三国同盟問題の決着をはかり、汪精衛問題をかえりみる暇もなかったようだ⁽³²⁾。汪と密接な関係にあった影佐禎昭は、近衛首相の辞任によってしばらく香港へ渡航せず、汪との関係が、一時、中断された。

一九三九年二月一日、上海からハノイに到着した高宗武は、和平運動の今後の問題をめぐって汪精衛と打ち合せた。話しの結果としては、汪が出馬し、「救国反共同盟会」を創設し、それともない、南京で「国民政府」を樹立することなどであった⁽³³⁾。そこで汪は高宗武を東京に遣わし、その旨を平沼内閣に伝え、日本側の同意と支持を要請した。

日本へ渡る前、高宗武は影佐禎昭に「近々東京へ行く。誰か長崎まで迎えに来てくれ」と打電した。これは影佐にとって何よりも吉報であった。影佐は、ただちに、当時衆議員議員であった犬養健に依頼し、長崎に出迎えさせることになった。

二月二十一日に長崎に到着した高宗武は、犬養の案内の下に、長崎から福岡へ。さらに福岡から特別機で東京へ飛んだ。犬養は、「今度、何の用が一番中心ですか」とたづねると、高は、次のように述べている。

まあ、平沼内閣の実地測量ですよ。影佐さんからは、

新内閣になっても方針は変りはないと早速知らせてくれたが、これからひとつ東京へ行って内閣の熱意はどんな程度のものなのか、実際に観察しようと思っ
ているんです。汪先生も正直のところ、近衛さんを頼りにしていただけに、総辞職と聞いてがっかり
しているらしいです。⁽³⁵⁾

この度の、高宗武の来日は、汪精衛の「救国反共同盟創設」・「国民政府樹立」などの提案を持参し、重大な使命を帯びていた。高はまず箱根の富士屋ホテルで影佐・犬養らと会談した。その後、東京の平沼首相をはじめ、有田八郎外相らとそれぞれ会見し、提案などをめぐって日本側の同意と支持を求めた。平沼首相は五相会議を開き、汪提案を検討した上で汪を中心とする新中央政府設立を議決した。⁽³⁵⁾三月十八日、この議決案を香港駐在領事田尻愛義が高宗武に知らせた。それと同時に、興亜会は、この年四月一日より九月末まで中国海関税から毎月三百万元、合計一千八百万元を汪精衛に提供し、「救国反共同盟会」創設の資金として当てさせることを決定した。⁽³⁶⁾
当時、ハノイで「暫らく沈黙を守り、静かに事態を観察する」⁽³⁷⁾汪精衛は、日本の支持と援助を得て、喜こんだことはいうまでもない。しかし、意外な事件が起った。

三月二十一日に汪と同居していた秘書曾仲鳴が、重慶国民政府のスパイに暗殺されたのである。この事件の、汪に与えたショックは非常に大きかった。曾死後の三月二十七日、汪は、「一例を挙げる」との文を書き、一九三七年十二月六日に国民政府の、漢口で開かれた国防最高會議第三十四次常務委員会の會議記録全文を公表した。⁽³⁸⁾

そのねらいは、一、日本との媾和の主張は決して彼の一人よがりではなく、国民政府の多数閣僚の共通意見であり、蔣介石自身さえも含まれている、二、曾仲鳴の死は、「国」のためである、との二点だと思われる。いうまでもなく、この文の発表は、重慶国民政府の大きな反感を買うはずだと彼は予想していた。従って彼は、

この文を発表した後、いつ、どこで私は曾仲鳴同志と同じく殺されるかも知れない。しかし、私の期待は、全国民にこの文を読んでもらいたい。私の和平主張が理解されるならば幸いだ。この主張は、中国の生存、独立の道であるとともに、世界とアジアの長期安定の道である。⁽³⁹⁾

と述べている。これは明らかに日本と密接に結びつき、共に「共同防共」を行ない、「亜洲新秩序」を建設しようとするためにはたとえ命を捨てても惜しくはないと表

明したのであろう。

また、この文を発表したいまひとつの目的は、汪精衛が重慶国民政府と、あくまで対決する決意をも示したものであると考えられる。当時、日本政府は、汪の決意を見て、なんとか汪の身辺の安全を保護する方策を講じなければならなかった。汪を救出するため、陸軍大臣板垣征四郎は、影佐禎昭をハノイに派遣することにしたが、影佐は、救汪工作に陸軍省のみが当たることは妥当ではないと考え、陸海、外務三省、興亜院および民間人の代表と行動を共にする方がいいのではとの意見を板垣に提出した。板垣の了解を得て、影佐は、犬養健および外務省書記官兼興亜院事務官の矢野征記らとともにハノイへ向かった。影佐・犬養は、四月六日九州大牟田港出帆の山下汽船会社所属貨物船「北光丸」に乗り、十六日ハイフォン港に到着した。⁽⁴⁰⁾十八日に影佐、犬養、矢野らは、汪精衛に会い、会談を開始した。

会談の内容については、矢野の「渡辺工作現地報告」⁽⁴¹⁾の中に明記されている。その要点をとりあげると、一、汪精衛を中心とする中央政府の樹立、二、今後の和平工作をいかに推進するか、三、汪らはいかに安全にハノイを離れ、上海へ行くことができるか、との三点である。

いうまでもなく、汪精衛は影佐、犬養らの来援に感謝した。彼は、ハノイに滞在し続けると、みずからの生命の安全を脅されるのみならず、仏印当局の過度な保護下にあつて和平運動の推進も行きづまっております、ハノイを離れ、上海へ行く方がよいと考えた。⁽⁴²⁾

四月二十五日の夜、汪精衛一行十数人は、フランス籍小型汽船（七百五十吨）に乗り、仏印警官の保護下にハノイを去っていった。同汽船は、北光丸について行き、汕頭沖で汪らは、北光丸に移乗した。北光丸は、一旦台湾基隆に寄港した後、五月六日に上海に着き、八日に汪らは、同地に上陸した。

故犬養毅の恩情によつたものであろうか、北光丸で汪精衛は、自分の考えを犬養健に打ち解けて話しあつた。その内容をまとめると、以下である。

一、和平団体を組織して、言論の力で重慶国民政府の抗戦理論と戦うことは困難であるが、和平政府を作り、日華両国が手をつなげば、共に重慶に対決する上策になる。

二、何よりもまず日本政府が近衛声明を忠実に実行すべきである。さもなければ、信用を失う。

三、重慶国民政府をただ倒すのが最終目的ではない。

出来得れば彼らと合作して全面和平を実現するのが理想であり、この点がいわゆる反蔣運動とは本質的にちがうのである。

四、重慶国民政府が幸いにも私の運動に合流するならば、私の目的はそれで十分達せられるわけで、私は、ただちに辞職する。

五、中国人にとっては、抗日論も和平論も愛国心のあらわれで、みなそれぞれ違った形で国家を真剣に愛している。だから、こういう抗戦論者に対しては、ただ武力だけで信念を改めさせようとしても、これは不可能である。今中国国民が正直な気持を言えば、たとえ奥地の最後の一つの省でも抗戦によって残すことが出来るなら、それが他日の国家再興の礎になると確信している。和平運動の途上においては、随分と酷評を浴びせかけられたり、絶えず売国奴・漢奸と罵られることと思う。が、私はそれを甘受する覚悟だ。ただ一つ、日本の政策が私たちの約束のとおりであったと中国じゅうに知れ渡った時に、私たちの苦難は、はじめて光彩を放つものだと思う。

六、蔣介石が日本と提携する気持になっていた時は、いつも終始同調していた。私は、徳にも欠けている

し、見識も高くないので、ひたすら孫文先生の忠実な弟子を以て任じているだけだ。

七、私は、来月勿々にでも平沼首相をはじめ、日本政府の要人たちと東京で会見して、直接卒直な意見の交換をしたいと考えている。香港にいる同志には時期尚早論が多いが、いづれにせよ、上海にいる同志とも相談した上、貴方に連絡する⁶³。

要するに、「汪氏の意図する所は和平政府を樹立し日本との間に和平提携の活模範を造ることに依て重慶政府及一般民衆に対し和平論は決して根柢のないものではないことを事実によりて証明し仍て以て重慶政府を和平論に誘導し之を相携へて日本との全面的和平提携を齎さうと謂ふにある」と、影佐禎昭は指摘している。しかし、汪精衛の「全面的和平」の主張を深く分析すると、彼の和平主張の思想的背景が、徹底的な反共抗ソにあり、これを実行するためには、いかなる反動的勢力との結合をも辞さないという点にあったと考えなければならぬであろう。

三 反共抗ソの結合

汪精衛の重慶脱出は、中国の国共両党の抗日統一戦線

を破壊した行為である。中国の民族危機を救う角度から見れば、国家指導者としての汪の脱出は、全く国をあざむく「漢奸」であるといわなければならないのである。

当時、国際動向と、その複雑さを深く考えていなかった汪は、ファシズムと共産主義との対立を見ていたが、ファシズムと自由・民主主義との矛盾を十分に認識していなかった。ソ連がコミンテルンを通じてアジアを共産主義化しようとするのは、何よりも恐ろしい。ことに、中国共産党が蘆溝橋事変によって国共両党の抗日統一戦線を結成したことは、中国共産党の発展にきわめて有利となった。共産主義の脅威を食い止めるために、日本と協力し、共にアジアの「新秩序」を樹立しようとするのが、汪の「反共救国」の基本理念だったと考えられる。

もちろん、蒋介石も反共的であったが、一九三六年冬の西安事変によって「剿共」、すなわち共産党の壊滅的攻撃は、中止された。それ以後、日本軍の中国領土主権の侵害が日まじに激化し、中国は民族存亡の窮地に追い込まれた。つまり、日本軍国主義の脅威は、中国共産党より恐るべきだと考えた蒋介石は、ついに「容共連ソ」を以て日本に対抗することを、国民政府の国策とするに至ったのである。

蘆溝橋事変後、国共両党の関係が、敵人から友人へと変わった。この年の八月二十一日、南京で国民政府とソ連政府の間に、「中ソ相互不可侵条約」が結ばれた。その主な内容は、締結国が第三国と結んで相手国を侵略することはゆるされないというものであった。当時、日本政府から見れば、この条約は、明かに反日同盟条約にはかからない。南京より重慶へ移った国民政府は、長期抗戦のかまえができた。その時、中国の抗戦に熱心に援助した外国は、英米でなく、ソ連であった。蘆溝橋事件の一九三七年から一九四〇年にかけて、ソ連が、中国に提供した借款は、合計四億五千万ドルに達した。そのほかに、軍事顧問団・空軍志願隊を中国へ派遣、とりわけ、空軍の支援は大きかった。戦闘機千余機、パイロット二千余人が、直接か間接に武漢、重慶、成都の空中戦に参加した。⁴⁹このような状況の下、重慶国民政府が「中ソ相互不可侵条約」を一方的に廃棄し、逆に日本と結託して反ソ、反共を行なうことは、至難であるといわなければならないのである。⁴⁶しかも、そういう動きを、中国共産党は決して容認しないはずだ。

国民政府の全面抗戦を支持するため、一九三七年八月二十五日、中国共産党中央委員会は、「赤軍を国民革命

軍第八路軍に改編する」と宣言し、朱徳を軍の司令官に、彭徳懷を副司令官に、鄧小平を軍の政治部副主任にそれぞれ任命した。これは、中共中央政治局拡大会議、すなわち「洛川会議」で決定されたものである。国共両党抗日統一戦線にとって、この会議の意義はきわめて重要だった。毛沢東の「中共の目前情勢と党の任務決定について」との文の中で、「根拠地を作る」、「赤軍の力を保存、また拡大する」、「わが軍の行動はわが党みずからが決定、蔣介石の命令に従うことは許さない」、「国民党に支配された地域では、民衆の抗日運動をやめさせ、国民党の一方的抗戦路線と戦う」と、強調されている。これを反共的汪精衛から見れば、中共が抗日統一戦線の絶好のチャンスをつかみ、党勢を拡大し、国民党の政権を奪い取るうとしている以外にない、と考えた。そこで、彼は恐怖を覚えたのである。

抗日戦争において、八路軍が英雄的に戦い、輝かしい勝利を得たのは、一九三七年九月二十五日、平型関での林彪の部隊と板垣征四郎の第五師団との対決においてだろう。この戦役で、日本軍は大きな損害をこうむった。しかし、その後、八路軍の作戦計画は、ゲリラ戦に変わり、ついに太行山の山岳地帯に深く入り込み、根拠地を作った。

また、同年十月二十日に中共の新しい部隊たる新四軍の編成が公表された。一九三七年の冬までの、わずか数カ月のうちに、八路軍の勢力は太行山の山岳地帯から河北、山東、河南諸省の大平原区にまで広がった。他方、葉挺が率いた新四軍万余人は、揚子江下流域一帯で大いに活躍していた⁽⁴⁸⁾。

平型関の戦に負けた板垣は、やがて近衛内閣の杉山の後任として陸相に任命された。近衛内閣解散後、板垣はひきつづき新内閣平沼首相の陸相となった。従って板垣は「汪精衛工作」の中心的人物で、汪の対日交渉の最も重要な相手方であった⁽⁴⁹⁾。

国共統一戦線下、中共の勢力が強くなればなるほど、汪精衛の恐怖感は増大して行く。一九三九年一月三十日にハノイで、汪は、「ソ連を安心して眠らせるため、中共は抗日戦争を継続せざるをえないと唱えている」、「抗日戦争がつけばつけばつづくほど、国民の窮乏がひどくなり、国の財政も圧迫される。共産党はこれを口実にして、いっそう革命を推し進めている」と述べた⁽⁵⁰⁾。同年三月三十日、彼の「華僑某君宛の返信」の中で、抗日戦争がそのままつづくと、中共は必らず「火事場泥棒を働こう」とする、また、中共のゲリラ戦は、昔の流民反乱と同じ、

社会秩序をかき乱すものにはかならない、と述べている。⁽⁵¹⁾

一九三八年七月十日に張鼓峰で日ソ間の衝突が起った。当時、多くの人は、日ソの全面的戦争がいよいよ本格的に始まるだろうと思つたが、周仏海は、ソ連が日本と戦う決意は全くないと断定した。⁽⁵²⁾なぜなら、スターリンは、ばかな行いを絶対しないからだ。また、周は、共産党におどらされないよう、と人にアドバイスした。⁽⁵³⁾一九四六年六月三日、陳公博は刑場へ行く前、蒋介石宛一通の遺書を残した。その中には、「一時も忘れることのできなかったのは、ただ共産党の問題のみである。というのは、この問題は国家の前途にかかわり、中国々民党の前途にかかわり、さらに先生の前途にかかわるからである」とある。⁽⁵⁴⁾

以上、汪精衛グループの対日媾和の主ないきさつである。彼らが提唱した「反共救国論」は、結局、日本軍国主義者に利用されたにすぎなかった。これは、彼らの一方的な見方による誤算ではあるまいか。

さて、日本側の反共抗ソは、いったいどうなっているのか。

前掲の「日華協議記録」および「近衛三原則」の声明によつて日本政府や近衛自身は、何としても反共を遂行

したい旨を明らかにしている。とりわけ近衛の、「東亜ノ天地ニハ、コミンテルン勢力ノ存在ヲ許スヘカラス」という主張は、きわめて汪精衛の気に入り。汪と近衛との結合が、この「反共抗ソ」の理念に基づいて成立した。この結合は、汪の国家主義と民族主義を越えた理念の上で成立したものだと考えられる。

本来、対華政策においては、近衛首相と陸軍省、また陸軍省と参謀本部にそれぞれの意見があり、一致していなかつた。近衛内閣誕生後まもなく、蘆溝橋事変が起つた。事変の勃発に対して重大な責任を持つ近衛首相は、「僕は支那事変以来多くの政治上過誤を犯した。之に対して深く責任を感じて居る」、「殊に僕は支那事変に責任を感じればこそ、この事変解決を最大の使命とした。そしてこの結論に達し、日米交渉に全力を尽したのである」⁽⁵⁵⁾と述べている。つまり近衛首相は、当初、英米外交路線に沿つて日中戦争を早期に終結させようとした。これを実現すれば、全力を挙げて「反共抗ソ」の政策を励行することができると思つたようだ。

参謀本部の対華方針については、参謀本部第二課が制定した「対ソ戦争指導計画大綱」の中に、「英米ノ中立ヲ維持セシムル為ニモ支那トノ開戦ヲ避クルコト極メテ

緊要ナリ」とある。⁵⁶これは、上述の近衛意見とほぼ一致していると思われるが、陸軍省の考えは、そうではなかった。

一九三六年十一月、広田弘毅内閣がドイツとの間に締結した「日独防共協定」は、主に陸軍省の意見によったものであった。近衛内閣誕生後まもなく、蘆溝橋事變の勃発を見た杉山陸相は、對華出兵を唱え、速戦速決のやり方で中国を屈服させようとした。当時、陸軍省は、スターリンはソ連で肅清政策を行なっている最中で、中国援助のため、対日開戦にふみきる可能性は、全くないと断定した。平沼内閣成立後、ソ連の滿蒙侵犯を食い止めるため、一九三九年七月三日に陸軍省は、「時局外交に關する陸軍の希望」との案を提出し、「防共樞軸を強化する」こと、英國もしくは仏国をして「親蔣援支政策を拋棄せしむる」こと、さらに「米国をして少くも本事變件中立的態度を維持せしむる」ことなどを強調した。⁵⁷故に、平沼内閣は全力を尽して日、独、伊三国の反共抗ソの軍事同盟協定を早期に完成させようとした。しかし、對英作戦のため、ドイツは一転してソ連との間に不可侵条約を結ぶに至った。世界情勢の見通しを誤った平沼首相は、「ヨーロッパ情勢は複雑怪奇」との声明を發表し、

内閣総辭職を行なった。にもかかわらず、三国防共同盟の成立を促進しようとした陸軍省の努力は秘かに続けられた。そして一九四〇年九月二十七日に至り、日・独・伊三国同盟は、ついにベルリンで結ばれた。その後、日本軍部の對英米開戦の体制が、やっとできた。

要するに、近衛首相、參謀本部および陸軍省はそれぞれ異なる對華方針をしていたが、反共抗ソの点では、完全に一致していた。汪精衛らの重慶脱出の主な理由は、「反共救国」ということであつた。近衛・汪の接近点はこの一点にあつた。

四 近衛に対する汪の期待

前述の影佐、犬養、矢野らがハノイ滞在中の汪精衛を救出した際、高宗武の態度に對して矢野は、甚だ不滿を抱いていた。というのは、ひとつには当時、汪精衛の代表として來日した高は、箱根と東京で日本当局と數回にわたつて會談したが、ハノイに戻つた際、日本側との會談の全容を汪に充分伝えていなかったこと、いまひとつは、高が、ひそかに重慶國民政府と結託していたふしがあつたからである。⁵⁸そうであれば、逆に高は、汪の真意を充分に日本当局に説明したのか、という疑問もあるの

ではないか。

もともと、首相を辞職した近衛は、枢密院議長兼平沼内閣無任所大臣であり、また興亜会の最高責任者でもあった。対華政策において、近衛の影響力を、無視するわけにはゆかない。当時、汪精衛の近衛に対する親近感は、日本政府に対するそれより重かったと見られる。平沼内閣が対汪将来問題を、いったいどのように対処するか、これは汪精衛にとって死活問題だといってよい。平沼首相・有田外相らの諒解と援助を得る足がかりとして、汪は、近衛に望みをたくす他なかった、と考えられる。

前述のように、一九三九年二月初旬、汪精衛は高宗武をハノイまで呼び出して、みずからの将来問題をめぐって高と打ち合せた。その時、汪の指令を受けて来日した高は、汪から近衛宛の一通の親書を携えて近衛に呈上した。この書信は、京都の近衛家に收藏され、今日に至るまでなお公表されていない。その全訳文は以下である。

近衛公爵閣下、昨年十一月三日、閣下の時局に関するご高論を拝見し、日中兩國の前途は好転の兆しを見せていると感じました。そして十二月二十二日に再び閣下の丁寧なご説明を読んで兩國当面の紛糾を解決し、東亜の永遠和平を樹立するにおいて、すで

にその基礎を得たということを深く感じました。私は、数年前から行政を担当し、日夜、悪運を挽回すべく方法を考えて参りましたが、昨年七月以後、不幸にも兩國は戦火を交える状態に至りました。これは何よりも心痛のきわみであります。

今や、閣下の心からの暖い表明を得て、兩國有志の士は共に難局を打開しうると信じております。当面、わが国が最も切迫しているのは、統一的で健全なる政府の樹立であります。しかもこの政府は必ず貴国政府と対等的地位あるものにして、始めて全國民の理解と信任を得られ、共同の目的に向かって共に協力することができます。もしもわが国が、統一的で健全な政府を樹立できなければ、それぞれがばらばらの分立状態で、その責任能力の所在も定かではなくなるでしょう。また、もしこの政府が貴国に從属するものであるならば、その存在意義は完全に失われてしまいます。私はわが国の國民が決して貴国の敵となる意のないこと、ただ皆は友人となれば存し、奴隸となれば亡ぶだろうと考えていることを、深く知っております。奴隸になるよりは、国を挙げ

て死に帰する方が、まだましです。このような苦衷と決意をここにつまびらかにし、わが国民をして、両国の友好にその方策がないではないことを知らしめます。すなわち私は、これより両国の当面の紛糾を解決し、東亜の永遠平和を樹立することが、必ずできると、固く信じています。ここに誠意をこめて閣下に申し上げる次第です。いまつつしんで同志高宗武に託し、閣下におうかがい致しまして深く敬意を表し、私の心のうちを申し上げます。なおご教示をいただければ、誠に幸甚です。これは、私の切実なる期待であります。

汪 兆 銘

二月四日⁽⁵⁾

この書信を通じて、汪精衛が、近衛の力を借りて彼の統一中央政府の樹立をはかろうとしたことが、明らかである。前掲の一九三九年三月十八日に香港駐在田尻領事より高宗武に渡された平沼内閣の、汪精衛新統一中央政府支持の議決案は、少なからずこの書信の影響によって成立されたのではないかと思う。

おわりに

近衛首相の声明に答えて、汪精衛は重慶から脱出した。しかも汪に追隨した重慶国民政府の要員もいた。周仏海、陳公博らがそれであった。これは、抗日戦争に対する重慶国民政府の内在的矛盾が現われたものであった。従来、国民政府における蔣・汪の権力闘争の歴史は相当長かつた。しかし反共抗ソの考えは一致していた。西安事変は、実は、張学良らの「逼蔣抗戦」であった。これをきっかけに一気に、中国共産党再生の道が開かれた。この情況下、日本軍部は、国共両党抗日統一戦線成立の兆しを感じ、不安が高まり、ついに蘆溝橋事件を起した、と考えられている。とりわけ、日本軍の対華侵犯は中国民族の存亡にかかわるものとして、国民政府の抗戦の決意が固まった。中ソ相互不可侵条約調印後、ソ連の中国援助が、日本に与えた刺激は相当大きかった。やがてドイツ大使トラウトマンの和平の仲介は、当時の複雑な国際関係を反映して、生まれたものだといってもよい。その時、日本の対華和平工作の目的は、主に国民政府の抗戦氣勢をそごうとするものにはかならなかった。たとえば、「汪精衛工作」、「蒋介石工作」および他の国民政府要人への工作が、それである。それらの秘密工作が、日本の各機

関、各団体によってほぼ同時に推し進められていた。「汪精衛工作」が成功したにもかかわらず、「蒋介石工作」を中止するわけにはゆかなかつた。なぜなら、汪精衛が重慶から脱出したにもかかわらず、重慶国民政府をいささかも弱体化させられなかつたからである。のみならず、蔣と仲の悪かつた竜雲さえも汪の傘下に収められなかつた。これでは、汪の利用価値が低い。故に、日本は暫く汪の処遇問題を放置した。しかし、そのまま放置すればするほど、他の対華和平工作に悪い影響をおよぼす恐れがある。結局、平沼首相は汪の新統一中央政府樹立の方針を決定した。ついに汪は、ハノイから上海へ。汪の望んだ対等的政府とは、程遠い日本の傀儡政府としての政治舞台を歩み始めたのである。

註

- (1) 中国々民党中央委員会党史会編『中華民国重要史料初編—対日抗戦時期』第六編「傀儡組織」(三)四六頁。
- (2) 当時の参謀本部は、閑院宮参謀総長が高齢で、実務にたずさわらず、参謀次長の今井清中将は病氣療養中であつたので、第一作戦部長の石原莞爾少将が最高の責任者であつた。「石原莞爾中将回想応答録」によれば「石原個人としては不拡大を以て進みましたが、其決心に重大なる關係を持つものは対ソ」

戦の見透しでありました」とある。角田順編『石原莞爾資料』(原書房、昭和四二年)四三七〜四三八頁。

(3) 外務省編『日本外交年表並主要文書』下三六五〜三六六頁。

(4) 同上三六九〜三七〇頁「蘆溝橋事件に関する政府声明」(昭和十二年八月十五日午前一時十分発表)。風見章『近衛内閣』(日本出版協同会社、昭和二六年)四三〜四五頁参照。

(5) 石原莞爾前掲書四四〇頁「上海出兵の経緯」には、「上海出兵は海軍が陸軍を引摺って行ったもの云々でも差支へない」とある。

(6) 同上四四一〜四四三頁「事変解決の工作」。近衛内閣前掲書六五〜六六頁。

(7) 彭沢周「中日戦争初期的和談」『伝記文学』第五四卷第三期。

(8) 注(3)三八六〜三八七頁。

(9) 石原莞爾前掲書四四一〜四四三頁「事変解決の工作」。

(10) 矢部貞治『近衛文麿』(時事通訳社、昭和三三年)九〇〜九一頁。

(11) 近衛内閣前掲書七九〜八〇頁「近衛手記」。

(12) 宇垣一成『宇垣日記』(朝日新聞社、昭和二九年)三一三〜三一五頁。

(13) 注(3)三八九〜三九〇頁。

(14) 蔡徳金編注『周仏海日記』(中国社会科学出版社、一九八六年)上册一四六頁。

- (15) 注(3)四〇一頁。
- (16) 周仏海日記前掲書一八四〜一八五頁、十一月八日(火)の条。
- (17) 注(3)四〇一〜四〇四頁。
- (18) 注(16)一九四頁。
- (19) 同上。
- (20) 矢部貞治『近衛文麿』(弘文堂、昭和二十九年)五八八頁。今井武夫『支那事件の回想』(みすず書房、昭和三九年)八八頁には、「当時私は、上海で汪出発の確報を待機したが、何等の通報がないため焦慮の余り、七日上海を出発し、福岡、台北を経て、十二日香港に到着した。高宗武と連絡した結果、漸く重慶の事情と汪兆銘の行動予定を明かにすることが出来た。併し相反する各種情報が乱れ飛んで容易に樂觀を許さず、現に十二月二十日既に汪の河内到着の確報があった。」とある。
- (21) 注(3)四〇七頁。
- (22) 周仏海日記前掲書二二三頁、十二月二十九日(木)の条。
- (23) 近衛文麿前掲書六一三頁。近衛内閣前掲書一八二頁には、「近衛氏としては、汪氏脱出の知らせがあったら、すぐに、いわゆる近衛三原則の声明を發表し、そのあとで、ただちに退却できるよう、あらかじめ後任首相をきめておきたいという、はらでいたのである」とある。
- (24) 近衛内閣前掲書一七八頁。

- (25) 同上一九四頁「近衛日記」。また、『近衛日記』(共同通信社、昭和四三年)一四四〜一四五頁参照。
- (26) 岡義武『近衛文麿』(岩波新書、一九七二年)八五頁。また、近衛秀麿「兄・文麿の死の蔭に」には、「僕の家では代々政治家型と学者型と二通りにはっきり分れている。政治家型というのは芸術家と相通ずるところがあるわけであるが自分の考えをバリバリ実行する型で、僕などはその部類かも知れぬ。もう一つの型は静かにものを考える学者型で、兄はそのほうであつたらう。事實は逆に政治家になつてしまつたが、どう考えても政治家という柄ではなかつた」とある。さらに、秀麿によれば、兄は「陸軍を抑えなかつたら、日本が危い」、「日本の陸軍を黙らすのは、ちよつと手に負えそうにない。そこでこれ以上長居は無用と思つたから僕は辞意を表明した」といつた、としている。(『文芸春秋』にみる。昭和史』第一卷六八四〜六九八頁収録、一九八八年)
- (27) 汪精衛「ハノイの正月」、雷鳴『汪精衛先生伝』(政治月刊社、一九四四年)三五四〜三五五頁に見える。
- (28) 黄美真・張云編『汪精衛集团投敵』(上海人民出版社、一九八七年)二八〜三四頁。
- (29) 陶希聖『潮流与点滴』(伝記文学出版社、民国五三年)一六九頁。
- (30) 注(12)三二三〜三二六頁。
- (31) 矢部貞治氏は「近衛は宇垣辞職のとき、すでに心

中に辞意を固めていたので、汪工作で対華声明を發表したら、いよいよ辞職を執行するハラであった」と述べている(注(10)一〇二頁)。

(32) 注(10)一〇五頁。

(33) 外務省外交史料館蔵S No. 493「渡辺工作」(第二期計画)。

(34) 犬養健『揚子江は今も流れている』(文芸春秋新社、昭和三五年)一〇九〜一一〇頁。また、犬養はこの本は人物の評伝ではなく、みな蘆溝橋事變の背景をなす動向を説明したものでばかりであり、唐紹武(すなわち高宗武)をはじめ、生存している人々については、その人たちの万一の迷惑を恐れて仮名を用いた、と述べている。

(35) 注(33)昭和十四年二月二十八日付「影佐渡辺会谈報告」。

(36) 防衛庁防衛研究所戦史室編『中国事変陸軍作戦史』(朝雲新聞社、一九七五年)第三卷一八〜四四頁。

また、従来、中国の海関はイギリスに管轄されていたが、日本軍が上海を占領してから、上海の海関管理権はイギリスの香港上海銀行より日本の正金銀行上海支店に移った。従って興亜会はこの海関税の使用を決めることができただけである。

(37) 注(7)七〜一五頁。

(38) 注(1)。また、汪精衛政府宣伝部『和平反共建国文献』第一輯「中国之部」七〜一四頁にも収録されているが、「第五十四次常務委員会」の「五十四次」

は、「三十四次」の誤りである。

(39) 同上。

(40) 影佐禎昭『曾走路我記』(『現代史資料』(13)『日中戦争』(五)三四九〜三九八頁収録。みすず書房、一九六六年)第六章には「我々は四月六日三池出帆の山下気船北光丸に乗り四月十四日仏印に到着し河内に入る事が出来た」と。しかし、今井武夫は、「影佐と犬養は四月八日三池港出帆の山下気船会社所謂船北光丸に乗船し、十六日海防港到着の上、河内の台湾拓殖会社支店に入った。之れより先き伊藤と矢野は東京から飛行機で同地に先行していた」という。(今井武夫前掲書九四頁)。

(41) 注(33)。

(42) 影佐禎昭前掲書。

(43) 犬養健前掲書一五七〜一七一頁。『曾走路我記』参照。

(44) 注(42)第六章。

(45) 朱鈴・張先智『共産國際与中国革命關係史略』(西南交通大学出版社、一九八八年)二一七頁。向青『共産國際与中国革命關係論文集』(上海人民出版社、一九八五年)二〇七〜二〇八頁。

(46) 一九三七年の冬、ドイツ駐華大使トラウトマンの和平仲介に対して、ソ連はきわめて不安を示した。ソ連の憂慮を解消するため、蔣介石はスターリンあてに打電し、諒解を求めた。注(1)第三編、「戦時外交」(二)三三五〜三三六頁。

- (47) 中共中央党校党史教研室資料組編『中国共産党歴史重要會議集』(上海人民出版社、一九八二年)二〇〇～二〇五頁。
- (48) 袁旭・李興仁等編著『第二次中日戦争紀事』(檔案出版社、一九八八年)一三七頁。
- (49) たとえば、一九三九年五月三十一日に東京を来訪した汪精衛は、同年六月十一日、十五日前後二回にわたって板垣陸相と、南京での中央政府創立の問題をめぐって会談し、支援を要請した。
- (50) 汪精衛政府宣伝部編『汪主席和平建国言論集』七～九頁「問答」。一九四〇年。
- (51) 同上二一～二八頁。
- (52) 周仏海「回憶与前瞻」『中華日報』一九三九年七月二二日～二四日付。
- (53) 同上。
- (54) 陳公博『苦笑録』、朱全元・陳祖思『汪偽受審紀要』(浙江人民出版社、一九八八年)五六頁。
- (55) 近衛家文書『通隆君手記』。
- (56) 石原莞爾資料前掲書一八六～一九二頁。
- (57) 『現代史資料』(9)『日中戦争』(二)(一九六四年、みず書房)二六三～二六五頁。
- (58) 注(3)「渡辺工作現地報告」(昭和十四年五月十五日)。
- (59) 近衛家文書R9 一六一号